

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 10 月 18 日現在

機関番号：33704

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24530838

研究課題名(和文) 児童の積極的授業参加行動の規定要因とその発達的变化に関する研究

研究課題名(英文) A study on determinants of the pupils' positive class participation in elementary school and its' developmental changes

研究代表者

安藤 史高 (ANDO, Fumitaka)

岐阜聖徳学園大学・教育学部・准教授

研究者番号：70390036

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、児童にみられる授業への積極的な参加行動を「積極的授業参加行動」とし、「注視・傾聴」、「挙手・発言」、「準備・宿題」の3つに分類した上で、社会的・人格的要因の影響とその発達的变化について検討を行った。

5因子性格特性・自己意識・学級適応・学級内での友人関係を取り上げ、検討した結果、全ての積極的授業参加行動に共通する関連も示されたが、3つの行動に特徴的な影響も見られた。

研究成果の概要(英文)：The present study investigated the effects of social and personality factors on the pupils' positive class participation in elementary school and its' developmental changes.

In study 1, we interviewed the primary teachers and students in a teacher training course about the determinants of the pupils' positive class participation in elementary school. Study 2 and 3 examined the effects of Big Five personality traits, self-consciousness, subjective adjustment to the classroom and school life and friendship in class on the pupils' positive class participation. The results showed that there were common effects and characteristic effects.

研究分野：教育心理学

キーワード：積極的授業参加行動 児童 社会的・人格的要因 5因子性格特性 自己意識 友人関係

1. 研究開始当初の背景

我々は、挙手や発言のような行動のみならず、授業に集中して話を聞くなどの行動も含めた授業への積極的な参加行動を「積極的授業参加行動」とし、その様相を検討してきた。その結果、積極的授業参加行動は3つの側面に要約可能であることが示されている。第一に、余計なことをせずに授業に集中して話を聞くような「注視・傾聴」、第二に、発言や返答などで意見を表明して授業に主体的に関与する「挙手・発言」、そして第三が、授業時間外における授業の準備や課題（宿題）をこなす「準備・宿題」である。

これまでの検討では、特に動機づけとの関連に注目し、授業への動機づけが積極的授業参加行動を促進することが明らかとなってきた。しかし、積極的授業参加行動には動機づけだけでなく、さまざまな要因が影響を及ぼしていると考えられる。

そこで本研究では、

- (1) 授業場面において、児童の積極的授業参加行動を規定する社会的・人格的要因を明らかにする。
 - (2) 積極的授業参加行動と社会的・人格的要因がどのように関連しているのか。また、その関連が発達的にどのように変化するかを明らかにする。
- の2点について検討を行う。

2. 研究の目的

- (1) 児童の積極的授業参加行動を規定する要因の検討

今までの積極的授業参加行動に関する研究では、主に動機づけとの関連が検討されていた。本研究では、小学校の現職教員と教員養成課程の学生を対象とした面接調査を行い、児童の積極的授業参加行動を規定する要因にどのようなものがあるのかを探索的に検討する。

- (2) 児童の積極的授業参加行動を規定する社会的要因の検討

研究1において示された規定因の中から、社会的要因に注目し、積極的授業参加行動に対する影響について検討する。

授業は学級集団単位で実施されるものであり、そこでの行動は、教師・児童及び児童・児童間の相互作用による影響を強く受けると考えられる。本研究では、社会的要因のなかでも学級適応と学級内での友人関係を取り上げる。研究1の面接調査では、他者の視線や評価を気にして積極的授業参加行動が促進/抑制されるといった言及がみられたことから、学級に適応しており、他の児童との関係性が形成できている場合、積極的授業参加行動が促進されると考えられる。

- (3) 児童の積極的授業参加行動を規定する人格的要因の検討

研究1において示された規定因の中から、

人格的要因に注目し、積極的授業参加行動に対する影響について検討する。

人間の人格的な特性は種々の行動の基盤となるものであり、授業中の行動についても人格的な要因の影響を受けと考えられる。本研究では、近年主流となっているパーソナリティ理論である5因子性格特性を取り上げる。また、社会的行動に強く影響するとされている自己意識についても検討を行う。

3. 研究の方法

- (1) 児童の積極的授業参加行動を規定する要因の検討

小学校教員12名および教員養成課程の学生37名を対象として、面接調査を行った。個別の半構造化面接を行い、児童の積極的授業参加行動の規定因、その発達の变化、指導上の工夫などについて尋ねた。面接時間は30分程度であった。

- (2) 児童の積極的授業参加行動を規定する社会的要因の検討

公立小学校の3~6年生を対象にした質問紙調査を実施した。質問紙は、積極的授業参加行動尺度、所属学級に対する学級適応感尺度(江村・大久保,2010)、ソシオメトリック・テストから構成されていた。ソシオメトリック・テストでは、「勉強を教えてもらいたい人(学業場面)」および「休み時間に一緒に遊びたい人(遊び場面)」を学級内からそれぞれ3名まで挙げさせた。調査実施時間などに配慮し、と、とを組み合わせるため、学級適応感をソシオメトリック・テストは異なる児童に実施されている。

- (3) 児童の積極的授業参加行動を規定する人格的要因の検討

公立小学校の3~6年生を対象にした質問紙調査を実施した。質問紙は、積極的授業参加行動尺度、小学生用主要5因子性格検査(村上・畑山,2010)、自己意識尺度(桜井,1992)から構成されていた。調査実施時間などに配慮し、との「良識性」、「外交性」、「協調性」、との「知的好奇心」、「情緒安定性」、とを組み合わせるため、異なる児童に対する3回の調査を実施した。

4. 研究成果

- (1) 児童の積極的授業参加行動を規定する要因の検討

まず、小学校教員の面接調査に基づき、「注視・傾聴」、「挙手・発言」、「準備・宿題」のそれぞれについて、「よく行う児童/行わない児童の特徴」についての言及を分析し、その規定因について分類した(Table 1)。行動によっては言及されない要因も一部にみられたが、ほぼ3つの行動に共通した要因が挙げられた。

Table 1 面接調査で示された積極的授業参加行動の規定因

個人内要因	性格的要因	性格, 自己意識 等
	認知的要因	自己や勉強に対する認知, 価値づけ
	能力的要因	知的能力等, 能力とそれに対する評価
	動機づけ的要因	動機づけ (経験を経て動機づけに至るものも含めて)
個人外要因	学校内 (教師) 要因	教師の指導や教師と児童の関係性
	学校内 (子ども) 要因	クラスの構成員の人間関係, 他児の影響
	学校外要因	家庭環境, 親の関わり方, 塾 等
その他		上記以外のもの

児童の側の要因(個人内要因)としては、性格的要因・認知的要因・能力的要因・動機づけ的要因に分類された。この4つの要因に関する言及は、3つの積極的授業参加行動全てにおいてみられた。しかし、例えば性格的要因であっても、具体的に示される性格特性は積極的授業参加行動ごとに異なっており、行動ごとの個別性も示された。

児童以外の要因(個人外要因)は、学校内(教師)要因・学校内(子ども)要因・学校外要因に分類された。これらの要因に関する言及は、行動によって大きく異なっていた。「挙手・発言」については、学校内の2要因についての言及がみられる一方で、「準備・宿題」については、親の働きかけといった学校外要因に関する言及が多くみられた。

教員養成課程の学生を対象とした面接データについては、発言を形態素に分解したのちに、Table 1 のカテゴリに準じたカテゴリを作成し、出現率を3つの行動間で比較した。その結果、3つの行動間で半数程度のカテゴリに出現率の差が有意であり、3つの行動がそれぞれ特徴的な規定因を持つことが示唆された。

(2) 児童の積極的授業参加行動を規定する社会的要因の検討

所属学級に対する学級適応感尺度は、「充実感」、「居心地の良さの感覚」、「被信頼・受容感」の3つの下位尺度から構成されていた。そこで、3つの学級適応感が積極的授業参加行動に及ぼす影響を検討するために、男女別にパス解析を実施した。

まず男児では、「居心地の良さの感覚」が「注視・傾聴」に、「被信頼・受容感」が「挙手・発言」、「準備・宿題」に影響していた。女児では「充実感」が「注視・傾聴」に、「居心地の良さの感覚」は「準備・宿題」に影響していた。また、男児と同じく「被信頼・受容感」が「挙手・発言」に影響を与えており、先生や友達から認められているという感覚

が「挙手・発言」の行動頻度を高めるという傾向が確認された。これらの結果から、所属学級への適応感が積極的授業参加行動を促進しうることが示された

ソシオメトリック・テストについては、学業場面・遊び場面それぞれについて、学級内の他の児童からどれだけ選択されているかという非選択率を算出した。そして、「被選択率0%」、「被選択率1~10%」、「被選択率11%以上」の3群に分け、被選択率の群を説明変数、積極的授業参加行動得点を目的変数とする1要因3水準の分散分析を実施した。

Table 2 学業場面での被選択率によるグループごとの積極的授業参加行動得点

	被選択率			
	0%	1~10%	11%以上	
人数	205	443	267	
注視・傾聴	3.21 (0.63)	3.36 (0.53)	3.49 (0.49)	全て「11%以上」 >「1~10%」 >「0%」
挙手・発言	2.82 (0.65)	2.93 (0.64)	3.25 (0.61)	
準備・宿題	3.10 (0.81)	3.32 (0.69)	3.60 (0.56)	

() 内は標準偏差

Table 3 遊び場面での被選択率によるグループごとの積極的授業参加行動得点

	被選択率			
	0%	1~10%	11%以上	
人数	88	526	301	
注視・傾聴	3.18 (0.64)	3.35 (0.55)	3.43 (0.52)	「11%以上」> 「1~10%」>「0%」
挙手・発言	2.84 (0.69)	2.95 (0.65)	3.13 (0.62)	「11%以上」 >「1~10%」「0%」
準備・宿題	3.18 (0.76)	3.31 (0.74)	3.49 (0.61)	

() 内は標準偏差

「挙手・発言」と「準備・宿題」においては、遊び場面での「被選択率0%」群と「被選択率1~10%」群の間の差が有意とならなかったが、全体的には被選択率が高いほど積極的授業参加行動の得点が高いという傾向が示され、学級内での友人との関係性が授業での行動に影響することが示された。

(3) 児童の積極的授業参加行動を規定する人格的要因の検討

性格特性の影響についてパス解析を行った結果、「良識性」は全ての積極的参加行動に、「外向性」は「注視・傾聴」および「挙手・発言」に、また「協調性」は「注視・傾聴」のみに影響を及ぼしていた。特徴的であったのは、「外向性」で、「注視・傾聴」へは負の係数、「挙手・発言」には正の係数を示した。児童の授業内行動における「外向性」の肯定的・否定的側面を示唆しているものと考えられる。

また、「知的好奇心」からは積極的授業参

加行動全体に影響していたが、特に「拳手・発言」に対する係数が高かった。「情緒安定性」については、反対に「拳手・発言」へのパスが有意とならず、相対的に「注視・傾聴」への係数が高かった。

また、自己意識は、公的自己意識と私的自己意識の2つの下位尺度と積極的授業参加行動の相関係数を算出した。私的自己意識からは、いずれの積極的授業参加行動に対しても、有意な正の相関が確認された。一方で、公的自己意識からは無相関か負の相関となっており、積極的授業参加行動は、概して公的自己意識によって抑制され、私的自己意識によって促進される傾向にあった。

Table 4 積極的授業参加行動と自己意識との関連

	公的 自己意識	私的 自己意識
注視・傾聴	-.04	.30 ***
拳手・発言	-.11 *	.28 ***
準備・宿題	.04	.15 ***

*** p < .001 * p < .05

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計10件)

小平英志・安藤史高・布施光代 児童の積極的授業参加に関する研究(26) - 潜在差得点モデルを用いた動機づけと授業行動の変化量の関連 - 東海心理学会第65回大会 2016.6.4 名古屋市立大学(愛知県名古屋市)

布施光代・小平英志・安藤史高 児童の積極的授業参加に関する研究(24) - 公的・私的自己意識および動機づけの影響 - 日本心理学会第79回大会 2015.9.24 名古屋国際会議場(愛知県名古屋市)

安藤史高・小平英志・布施光代 児童の積極的授業参加に関する研究(23) - 学級内での社会的地位の影響に対する縦断的検討 - 日本心理学会第79回大会 2015.9.24 名古屋国際会議場(愛知県名古屋市)

小平英志・安藤史高・布施光代 児童の積極的授業参加に関する研究(22) 教員養成課程の学生の捉える授業行動の背景要因 日本教育心理学会第57回総会 2015.8.27 朱鷺メッセ

安藤史高・布施光代・小平英志 児童の積極的授業参加に関する研究(21) - ソーシャル・サポートとの関連 - 日本教育心理学会第56回総会 2014.11.8 神戸国際会議場(兵庫県神戸市)

小平英志・布施光代・安藤史高 児童の積極的授業参加に関する研究(20) - 公的・私的自己意識との関連 - 日本教育

心理学会第56回総会 2014.11.8 神戸国際会議場(兵庫県神戸市)

安藤史高・小平英志・布施光代 児童の積極的授業参加に関する研究(19) - 学級内での社会的地位との関連 - 日本心理学会第78回大会 2014.9.12 同志社大学(京都府京都市)

布施光代・安藤史高・小平英志 児童の積極的授業参加に関する研究(18) - 教師に対する面接調査を用いた探索的検討 - 日本心理学会第78回大会 2014.9.12 同志社大学(京都府京都市)

安藤史高・小平英志・布施光代 児童の積極的授業参加に関する研究(17) - 教師に対する面接調査による検討 - 日本心理学会第77回大会 2013.9.20 札幌コンベンションセンター

小平英志・安藤史高・布施光代 児童の積極的授業参加に関する研究(16) - 児童の性格特性と学級適応感の影響 - 日本教育心理学会第55回大会 2013.8.18 法政大学

布施光代・安藤史高・小平英志 児童の積極的授業参加に関する研究(15) - 学年差、性差および縦断的検討 - 日本教育心理学会第55回大会 2013.8.18 法政大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

安藤 史高 (ANDO, Fumitaka)
岐阜聖徳学園大学・教育学部・准教授
研究者番号: 70390036

(2) 研究分担者

小平 英志 (KODAIRA, Hideshi)
日本福祉大学・子ども発達学部・准教授
研究者番号: 00442228

布施 光代 (FUSE, Mitsuyo)
明星大学・教育学部・准教授
研究者番号: 10454331